

アメリカの起業家精神—そのルーツを考える American Entrepreneurship: An Analysis on Its Roots

井原久光*
Hisamitsu Ihara

Abstract

This article discusses the roots of American entrepreneurship from the viewpoint of industrial changes and human alienation. The shift from the primary industry to the secondary industry due to the Industrial Revolution destroyed the community, causing the problem of alienation. Japanese management system has been successful in the secondary industry for its group-oriented features that help people feel less alienated. However, the shift from the secondary industry to the tertiary one due to the progressing Information Revolution is destroying the group-oriented organization. The Japanese government and companies are trying to introduce American type venture businesses to stimulate the present sluggish economic conditions, but they are neglecting the fact that American entrepreneurship is rooted in American's traditional lifestyles and values.

The article discusses the relationship between American entrepreneurship and the tradition of Puritanism and American democracy. Creating a new business has something to do with the image of independence such as creating a new country in the 18th century and moving toward the west in the 19th century. In this connection, this article discusses both expansionism and isolationism of Puritanism and American democracy.

Japanese people generally think that American

entrepreneurship is the result of the risk-oriented nature of American people, and that venture business is similar to speculative businesses or gambling. However, the American entrepreneurship is related to American traditions of self-made and independent small businesses. This article introduces a triangle model of small town, small government and small business.

Based on the author's experience, more American people tend to be attracted by small towns, people give more importance to the concept of "small government", and more people want to begin a "small business" rather than belonging to large organizations. This can be contrasted with Japanese society where all the political and economical functions are centralized to Tokyo and local small towns are dependent on large cities and people want to become a member of large organizations.

Along with this line, the concept of the "common" is introduced in the model. This article defines the "common" as the conceptual space that lies between the "private" and the "public" worlds where the common people can achieve their aspirations. This article relates the "common" concept to the history of Boston Common, the Commonwealth, Thomas Pain's "Common Sense" and the tradition of common law. The conceptual small space of the "common" becomes more important for the common

* 教授

people to achieve themselves, as the "public" world is expanding due to recent economic expansion and the progress of the Information Revolution.

The Japanese government and companies have learned the economic systems and management skills from the U.S., but now is the time to study the cultural backgrounds of American capitalism to conquer the problem of alienation.

要 旨

現代社会を産業の変遷と人間疎外の観点から整理した上で、アメリカの起業家精神のルーツについて論じた。産業革命により生活包括集団としてのコミュニティが崩壊し人間疎外が問題になっているが、情報化の進展（第三次産業への移行）により、現代人は組織からも切り離されつつある。孤立する現代人という観点に立てば、起業家精神のもつ意味は再検討に値する。本論では、アメリカの起業家精神が、ギャンブル精神ではなく、Puritanism と建国の精神と結びついていることを中西部の small town における生活実感から事例をあげて触れている。そこにみられる起業家精神では「経済的自立と精神的自律」がうまく調和して、アメリカの Puritanism や民主主義のもつ「拡張主義と孤立主義」が微妙なかたちでバランスしている。日本で起業家精神は育たないという異文化論もあるが、それではベンチャー支援は無駄という結論に達する。それはベンチャーのもたらす経済効果だけが問題となる経済論だけで議論されているからである。日本人は明治以来、アメリカ資本主義の表面的な経営技術だけを学んできたが、起業家精神は経営技術論では理解できないものを含んでいる。

目 次

はじめに

1. 現代社会の構図

- (1) 産業の変遷
- (2) 大衆社会と人間疎外

2. 自立と自律のための起業家精神

- (1) 大学院を出て新聞配達を始めた青年
- (2) small town の活力

(3) 孤立主義の伝統

3. 異文化論としての起業家精神

- (1) ギャンブル好きの国民性
- (2) 国土の広さと独立性
- (3) 遺伝子研究からみた新規探索傾向
- (4) 自己責任についての常識

4. 宗教と伝統の国

- (1) 祝祭日にみる宗教と伝統
- (2) Thanksgiving に見る建国精神
- (3) アメリカの歴史教育
- (4) 英雄伝説による歴史形成
- (5) 自己信頼の思想

5. Puritanism と起業家精神

- (1) 孤立主義のルーツ
- (2) 拡張主義のルーツ

6. アメリカン・デモクラシーと起業家精神

- (1) ジャクソン民主主義とは
- (2) ジェファーソン民主主義とジャクソン民主主義
- (3) Lowell にみる産業革命と民主主義
- (4) ジャクソン民主主義と平民主義

7. Small Government の思想

- (1) コモンとタウン・ミーティング
- (2) town meeting の伝統

8. 自己実現と起業家精神

- (1) 三つの small と common の感覚
- (2) 起業家精神における拡張主義と孤立主義
- (3) 自己信頼と少子化
- (4) Big Ship から small town へ

まとめにかえて

はじめに

アメリカには二つの故郷があると言われてい
る。一つは建国の発端になった New England で
あり、もう一つは「古き良きアメリカ」を残す
Midwest である。筆者は、大学院時代と昨年の在
外研究を Midwest の small town で過ごした
が、すでにアメリカの地方大学に留学した体験を
整理して、日米を比較した¹。

今年の夏は、もう一つの故郷である New
England を訪れる機会があった。大学時代にホー
ムスティした Boston 近郊の街 Arlington の家庭
を再訪し、Massachusetts を中心に、New

Hampshire, Vermont, Rhode Island の諸州を回った。

これらの留学・訪問体験から American democracy と American capitalism のルーツを考える機会があった。それは Midwest の生活のなかから感じ取った起業家精神 (entrepreneurship) について再考する機会を与えた。

本論に関して本格的な調査は今後の課題である。しかし、本論では日常的な体験に基づくエスノメソドロジー (ethnomethodology) 的アプローチを取り入れている¹⁾。歴史観については多少の文献的検討も行なったが、生活体験をベースに東部の訪問先で見聞きした旅行客の歴史観をあえて優先している。

また、筆者自身の留学・訪問体験に加えて、インディアナ大学の教授陣、十数年来の友人である Indiana の H 氏とそのファミリー、ホームステイした K 夫人、アメリカ生活の長い日本人家族などのインタビューが、本論のベースになっている。

アメリカという広大で多様な国を包括することは難しい。しかし、筆者が二度の留学や今回の夏季訪問(日常的体験)を通じて得たアメリカ感は、少なくともマスコミや一般書にある「日本的アメリカ感」と相違する。そのことの意味を、体験の実感が残るうちに整理しておきたい。

1. 現代社会の構図

アメリカについて述べる前に、産業の変遷と社会の変化を図式化してまとめておきたい。これは、アメリカの起業家精神が、単なるリスクテイキングを好む国民性に由来するばかりではなく、基本的なライフスタイルによることを論じたためである。

(1) 産業の変遷

人類が定住し、集落(つまりは社会の原形)を作り上げるきっかけになったのが農業革命 (agricultural revolution) である。この時より、人間は自然に手を入れ、計画的に生産活動を行うようになった。第一次産業中心の「農業社会 (agricultural society)」の誕生である。

この社会の経済的基盤は、農業のベースとなる土地であり、収穫は年貢という形で吸収され再配分されていた。この社会の生活基本単位は経済的に政治的にも基本的単位となっていた「共同体 (community)」である。この時代、人々の生活のほとんど全てがコミュニティにおいて完結していた。

イギリスに始まった産業革命 (industrial revolution) は、第二次産業中心の「工業社会 (industrial society)」を作り上げた。工業社会は、生産量によって自由に移動する労働力を必要とするため、土地に縛られていた人々の開放を前提とする。

それを実現したのが、フランス革命に代表される市民革命 (civil revolution) である。この市民革命と産業革命を通じて、封建的な土地や共同体に縛られていた人々は、「市民」となり「労働者=消費者」となった。

産業革命は都市化を推進し、コミュニティを崩壊させた。経済の基盤は、農業のベースだった土地から、工業を発展させる資本に移り、「資本主義 (capitalism)」社会が登場する。大量生産、大量流通、大量販売を前提とする大量消費社会が誕生し、人々は「共同体 (community)」にかかわって「組織 (organization)」に帰属するようになる。

今日、議論されているのは、農業革命→産業(工業)革命に続く第三の革命としての「情報革命 (information revolution) である。ここでは、

¹⁾ アメリカの底力は地方の small town にあり、大学教育にある。日本の「地方」と「大学」に共通して欠けている、アメリカの「地方」と「大学」に共通して息づいているのは「自治」と「競争」と「環境適応力」である。(拙稿「アメリカの州立大学」)

²⁾ 社会学者が好む「常識とは異なる視点」「新たな事実の発見」などは、市井の人々の実感を無視して「固定観念を覆すこと」や「新たな世界観を作る」という発見学的な興味に左右されているケースがある。ところが、社会学者自身が日常的な世界にあって専門分野以外ではズブの素人であるため、データの収集や解釈には限界があり、逆にこうした暴露的な研究が現実を歪めているとエスノメソドロジーでは批判している。(拙稿「パラダイム変革とエスノメソドロジー」)

進行形の社会の変化を産業構造の変化から読み取ってみたい。

農業革命が第一産業中心の農業社会を作り、工業革命が第二次産業中心の工業社会を構築したように、第三の革命としての情報革命は、第三次産業とりわけ情報・知識産業中心の情報社会を成立させると考えられている。

この社会では、経済の発達により、一国だけの閉鎖的な経済は成り立たなくなり、多国籍企業の製品は世界市場を対象にしている。環境問題は地球規模の問題であり、エネルギー資源問題も全世界で取り組まなければならなくなっている。人的交流は進み英語を中心とする国際語の普及がみられ、文化的交流も活発である。コンピュータ化、経済の国際化にともないデファクト・スタンダードが各国の法規制を越えて世界標準になりつつある。

こうした状況下、われわれの生活基本単位は、「コミュニティ」→「組織」から、「地球」へと拡大しているように思える。このことは、われわれ自身に大きな影響を与えつつある。

(2) 大衆社会と人間疎外

現代社会を切り取る第二の構図は、大衆社会論や人間疎外の問題である。工業化は都市化を伴う。都市化に伴うコミュニティの崩壊を論じたが、その際、人間は（少なくとも経済的あるいは表面的な）自由を得ようとして、自己を喪失しつつある可能性が高い。

ここでいうコミュニティとは、生活包括集団としてのコミュニティである[■]。したがって職場コミュニティ[▼]や国家レベルのコミュニティ論[▽]のことではない。

コミュニティでは、第1に、居住者に共有されている地域認識があり居住地域の境界性が認識されている。土地との繋がりである。第2に、生活空間が居住者の中で重なり合っており、地域内の居住者の集団性が高い。人間集団との繋がりである。第3に、居住者の間に共有されている生活のルールがある。それは、地域内道徳ともいべき、世代間の継承を求める行動基準である。規範（伝統的価値）との繋がりである¹⁾。

コミュニティの崩壊は、地域との繋がり、人間集団との繋がり、伝統的価値との繋がりから人々を切り離した。地域との繋がりをたった人々は、自由に移動することができる。また、人間集団との繋がりをたった人々は、他人との関係に無関心でいられる。さらに、伝統的価値から自由になった人々は、道徳に縛られずに生きていくことができる。

しかし、この表面的な自由を勝ち得た人々が、対価として受け取ったのが人間疎外の問題である。人々は、分業化された仕事、地域や人間集団からの乖離、生きる指針となる価値の喪失などで、孤独と疎外を感じている。

加えて、情報革命の進展によって、現代人は組織という集団からも切り離されつつある。企業を生活包括集団として取り込んだ日本的経営は、集

■ 唐澤和義は、国際基督教大学社会科学研究所の三鷹まちづくり研究会報告書「三鷹市のコミュニティがめざす新たな課題を求めて」の中の論文「コミュニティの崩壊と再生」（1991年）で、コミュニティを初めて「生活包括集団」という用語で定義している。

▼ 日常的な用語としての「コミュニティ」は、時として職場や趣味サークルなどにおける仲間やインフォーマル・グループまで含めることもあるし、実際に、P.ドラッカーは、plant community という用語を用いて「職場コミュニティ」を表現しているが、これはF.J.レスリスパーガーやG.E.メーヨーらの informal organization の延長として位置づけられると言われる。唐澤和義『産業社会とコミュニティ』勁草書房、1985年、p.225。の脚注(2)

▽ 周知の通り、R.M.マッキーヴァーは、「コミュニティという語を、村とか町、あるいは地方や国とかもっと広い範囲の共同生活のいずれかの領域を指すのに用い（マッキーヴァー『コミュニティ』ミネルヴァ書房、1975年、p.45.）」しており、必ずしも地域社会に特定していない。しかし、マッキーヴァーが「コミュニティの最も完全な類型は国である（前掲書p.135.）」という時のコミュニティとは「共同生活の相互行為を十分に保証するような共同関心が、その成員によって認められているところの社会的統一（前掲書p.135.）」であって、個別的の充足のために求められる分立的関心によって成立するアソシエーションと対をなす概念として定義されている（傍点は筆者）。

団生産性が重要な一部の大企業（第二次産業）で成功したものの、情報化の進展によって揺らぎつつある。企業に帰属していた中年が悩み、若者が携帯電話に走り、老人が孤独な死を恐れるのも、深刻化する人間疎外と希薄になりつつある自己アイデンティティのためであろう。

2. 自立と自律のための起業家精神

ここでは、筆者が日常生活や旅行の一コマに接したアメリカを振り返って、起業家精神を育成する文化的土壌について考えてみたい。

(1) 大学院を出て新聞配達を始めた青年

筆者が1年間の研修を終えて帰国する直前、最後に自分の車を売らなければならないという問題があった。アメリカでは個人間で車の売買が盛んである。地方紙の classified ad に載せることもあれば、キャンパスの掲示板に売りたい車の情報を出す方法もある。筆者はインターネットの中古車情報をもとに広告と掲示を出した。

何十人もの学生や市民が見に来たが、そのうち最も情報に早くアクティブに活動したのがインディアナ大学ビジネス・スクールを卒業して新聞配達をしている若者であった。彼は、携帯電話で自分の良く知る自動車ディーラーに検査を予約し、筆者の車を自己負担で点検した後に、その点検表をもとに価格交渉を始めた。情報網を生かしリスクを軽減することは、ビジネス・スクールで教える定石である。

インディアナ大学のビジネス・スクールは全米でもトップクラスの大学院で、MBAの資格は有名企業に入って高所得を得るパスポートでもある。ところが、彼は、学生時代に始めたピザの宅配アルバイトから、自分で配達業を始めることを考えたそうである。地方紙はもちろん、ニューヨーク・タイムズ、ワシントン・ポスト、U.S.A. ツディなど全国紙とも契約して、大学周辺を中心にインディアナ州の複数の都市で新聞配達業を始めたということだった。

そのため燃費の良い日本車を探していたようで、筆者の車を検討したようである。私は彼のアクティブなイメージとスマートな価格交渉の進め方（たとえば点検表を基にした交渉など）に驚く

とともに、大企業の一員になるのではなく「手応えのある仕事」「手の届く範囲でできる自分の仕事」をしたいという彼の言葉に感心した。

(2) small town の活力

アメリカでは大都市（たとえば政治首都である Washington）から発せられる全国ネットのニュースと同じウェイトで、small town の情報が重視される。周知のようにアメリカでは全国紙より地方紙が強い。実際に、都会にいる人々もミネソタの田舎町から流れるカントリーウェスタンのラジオを聞き、small town に憧れる。

駒沢敏器はアメリカの small town を人口1,000人以上5,000人以下と定義している²⁾ が、中西部では人口1,000人以下の町でも十分独自性を発揮しているところがある。また、筆者の住んでいた Bloomington のような大学町では人口が5万人以上もありながら、住民が例外なく Bloomington を（city とはよばず）town とよんでいたことから、small town の意識が強く残っていた。

駒沢は、small town を、①農業を経済的基盤とする firming community、②炭坑や工場閉鎖などで取り残された鉱・鉱業的 small town、③ヨーロッパ各国からの移民が定住した移民型 small town に大別しているが、本稿で論じるのは一番目の firming community である。それは、本論の主題である「自立」と「自律」が成り立つ場所だからである。本稿では、起業家精神のルーツを考える上で、「自立」を経済的独立、「自律」を精神的独立という意味で使いたいが、Midwest の small town には「自立」と「自律」が同時にみられる。

Midwest は Corn Belt とよばれる穀倉地帯である。Indiana 州はその真ん中に位置する。この地域では、奴隷などの外部労働者を使わない自営農家が土地を開拓したため、独立と相互信頼の精神が強い。後述するタウン・ミーティング（town meeting）が実質的に機能し、深い信仰心が政治意識と結びついている。

アメリカ社会は、キリスト教の影響を強く受けているが、中西部は、アメリカの原形を維持している。日曜の午前中はどこの店も閉まっていた、今でも帽子をかぶって教会に行く家族を見ること

ができる。Easter, Forth of July, Thanksgiving, Christmas を敬虔に祝い、農業祭を中心とした county fair や state fair を楽しむのが中西部のライフスタイルである。

このような small town に small business が息づいている。Indiana の中央に Indianapolis があるが、そこより少し南に Morgantown という small town がある。Morgantown はプラットとよばれる区画化によって入植が始まった。何もない大地を基盤の目のように切ってタウンホールやコートハウスが建てられた。東部の町にはコモン（後述）とよばれる広場があるが、中西部の small town には必ず町の中央にコートハウスとよばれる役所兼裁判所がある。これも民主主義の象徴である。

Morgantown は、Indianapolis から Kentucky を結ぶ鉄道が敷かれたことや、第二次世界大戦中に駐屯基地が近くにつくられたこともあって一時はかなり栄えた。大戦後、町は兵士がいなくなって寂れたが、4人の主婦がメインストリートに家庭用品の店を開いて活気を戻した。4人の主婦は、Main Street Indiana という Indiana 州の経済支援策を活用して町の復興に一役かった。

中西部の small town には町を活性化させた small business の英雄がいる。筆者の住んでいた Bloomington にはクック氏 (Mr. Cook) という事業家がいる。町を再生した。筆者が大学院にいた1980年代はじめにはダウントウンが寂れていたが、Mr. Cook は医療機器事業で成功し、コートハウスの内部を改修し、寂れた店を統合して外壁は昔の町並みを残しながら、モールのな商店街を作り、閉鎖された工場跡地に農家の朝市 (farmers market) を招聘して町を活性化した。

しかし、Morgantown を再生した4人の主婦は、自分たちの町を Bloomington から少し離れた観光地 Nashville のようにしたくないと語る³⁾。大資本によって商業化された町にしたいと考えているのである。ここにアメリカの small town の底力がある。経済的自立も大切だが「町おこし」のために自分たちの精神的自律が損なわれるならば、あえて事業を拡大しない。

組織の中の生活に慣れた人間は、small town の生活を「孤独で退屈なもの」と勘違いしがちであ

るが、自分で事業を起こし自分で生活するというライフスタイルは、決して孤独でも退屈なものではない。むしろ、大都市の大きな組織で働く方が、数段、孤独で退屈な生活かもしれない。

中西部の small business において、事業は生活の糧でもあるが、自己を実現する場であり、セルメイドのライフスタイルを守る場である。アメリカの small town には「生きることが事業である」という主張が感じられる。

(3) 孤立主義の伝統

Midwest の緑豊かな田園地帯には、丸太小屋から大統領に登りつめた Abraham Lincoln の世界、Mark Twain の『トム・ソーヤ』の世界、Laura Ingalls Wilder による『大草原の小さな家 (Little House on the Prairie)』の世界がいまだに残っている。都会の人々があこがれる「変わらない世界」が現実にある。「変わらない」ということは「遅れた」ということではない。近代化に取り残されたのではなく、近代化と一線を画す孤立主義があるから「変わらない」のである。

Indiana 州南部のスマールタウン Washington 周辺でアーミッシュ (Amish) の家族を訪問する機会があった。彼らの家は、電気・自動車など現代文明の成果を使わず、馬車で移動し、家の周りでは洗濯物を干しているのすぐ分かる。

ところが、彼らは広大な土地をもち比較的豊かに自立して暮らしている。農業をベースに観光や家具製作などで生計をたてており現代文明を巧みに利用している。自分たちの生活のためには宗教的信念から電気も自動車も使わないが、生産物を出荷するときは自動車を利用する。アーミッシュ料理をだすレストランでは電気オーブンを使い、アーミッシュ村のホテルは近代的エアコンがきいている。また、アーミッシュ家具の作業所では電動工具を使っている。

彼らは現代文明を否定しているのではなく、現代社会から逃避しているわけでもない。現代社会と一線を画して自分たちのライフスタイルを堅持しているのである。ここにも自律のために自立する人々がいる。

アーミッシュは宗教的にはピューリタンとは異なるが、そのライフスタイルには共通点がある。

ピューリタンはアメリカ入植当初、ろくな産業もなく苦勞したが、ケープコッド（鱈岬）周辺の魚をヨーロッパに輸出して生計をたてた。彼らは宗教上の信念から魚を食べなかったが、他人が食べることには無頓着だったのである。

アーミッシュは Ohio や Indiana など中西部に集中している。今日でも中西部のライフスタイルが孤立主義を許容しているからである。Indiana の small town には、ガレージの横に大きなパラポラアンテナを立てた家が多い。世界の情勢を衛星放送でキャッチしながら、自分たちの自己実現はガレージの中にあるとでもいいだけに、世界と一線を画して自分たちの世界を守っている。

筆者の古くからの友人 H 氏は、インディアナ大学を退職した後、ウィスコンシン州に別荘を買った。子供が同州にいるというのも一つの理由だが、彼の買った別荘は、子供の家族から遠く離れた湖のほとりにある。その湖は国立森林公園（National Forest）に囲まれていて民間の所有地は制限されている。

購入の動機について彼は「フィッシングやハンティングができる」こと以外に「周りが国立森林公園なので将来不動産開発が進んでも隣の家と距離をおくことができる」をあげていた。隣の家とは車で数分、最低限の食料を買う村も離れた「陸の孤島」で暮らすことが長年の夢だった」というのである。日本の過疎村はおそらく彼のライフスタイルからみれば「夢の地」ということになるかもしれない。

Midwest では過疎化が深刻にならずに、small town がしっかりと根付いて生き残っているが、この背景には、こうした個人レベルの孤立主義があると考えられる。

3. 異文化論としての起業家精神

もともと、アメリカ人は起業家精神が旺盛で、日本の土壌で起業家精神を育てることは難しい、という議論がある。日本でも何度もベンチャービジネス・ブームがあるが、それがいつとはなしに消えてしまうのは、異文化論による「不向き」の結論である。しばしば、アメリカ人のリスク志向や創造性と、それと対照的な日本人の安全志向や組織志向、あるいはコピーのうまさあげられ

る。根拠のないことではない。

(1) ギャンブル好きの国民性

ラスベガスはアメリカ人のギャンブル好きを象徴したような町である。砂漠の真ん中に派手なホテルの高層ビルが立ち並び、不夜城のカジノで遊び、華麗なショーを楽しむ。筆者が最初にラスベガスを訪れたのは1982年の夏だったが、その後、4度。訪れるたびに街は大きく立派になっている。ゴールド・ラッシュに一攫千金を夢見て西部に渡った「山師」たちのギャンブルを象徴するような街である。

ところが、今回の研修中に、東部の田舎町にもカジノがあることを発見した。Great Smoky Mountains の麓の街 Cherokee ではラスベガス並みのカジノがあった。この町は、名前からもわかるように全米19州にある Native American Reservations で運営される200のカジノの一つである⁴⁾。Native American とカジノの関係は本論のテーマと離れるので別の機会に論じるが、多くの Reservations でカジノがみられる。

Cherokee は、他の Native American Reservations と同様に、ドライ・シティとよばれる「禁酒の町」である。アルコールが欲しい場合は、隣町までいかなければならない。そのようなドライ・シティにもかかわらず、朝早くから、老夫婦がスロットル・マシーンに興じている様子を見て、アメリカ人のギャンブル好きを思い知らされた。

Indiana 州にも French Lick という small town に今世紀初頭カジノが開かれていて、アルカポネを始めとする有名人が集ったという記録がある。そこには当時の盛況ぶりをしのばせる大きなドーム状のカジノがあった。屋根付き野球場の草分け Houston Dome ができるまで、ドーム状の建物としては世界一だったそうである。

Indiana 州は非常に保守的なところである。そのような保守的な農業地帯の small town にもこのようなカジノがあったということだけでも、アメリカ人のギャンブル好きが示されている。

(2) 国土の広さと独立心

国土が広いので独立心が強いという議論もある。よく知られていることであるが、アメリカ人

と日本人で異なる physical contact や comfortable distance に関する距離感覚について生活実感から触れてみたい。

筆者が初めてアメリカに旅をした時は、“Excuse me”を「失礼します」と解釈し、アメリカ人は礼儀正しいと考えた。しかし、その後の生活経験から、“Excuse me”はアメリカ人のもつ「安心できる対人距離 (comfortable distance)」の感覚と密接に関係していることを知った。

アメリカ人は、身体が直接触れることを極端に嫌う。そのため、狭い人の間を通りぬける時や、相手と身体が触れそうな距離になると、本能的に“Excuse me”を連発する傾向にある。それは、自分が通るサインのようなものともいえる⁵⁾。

満員電車やバスに乗れないのも対人距離感に関連するが、飛行機などで狭いスペースにどうしても入らなければならない時は、隣の人と小さなチャットをする。このチャットが“Excuse me”の延長であることを生活体験の中から実感した。

日本人は、一度話し出すと永遠に話し込まなければならないと考えて会話を避ける傾向にあるが、この種のチャットは、短い挨拶が常識で、その後は無言でも一向に気まずい雰囲気は生じない。最後に別れるときに、もう一度チャットすればよい。

笑顔で“Hi!”と声を掛け合うのも、必ずしもアメリカ人が陽気だからではなく、相手との距離が一定以内に近づいた場合に「自分の存在を相手に知らせる」シグナルと思われる。これは筆者が“How are you?”をエスノメソドロジーとの関連で論じたこととも関連する⁶⁾。

(3) 遺伝子研究からみた新規探索傾向

欧米人の遺伝子は、そもそも日本人の遺伝子と異なり創造性に富んでいるという研究もある。筆者の専門外なので、多くは言及しないが、生物学の研究者から聞いた「新規探索傾向」と「リスク志向」の研究成果を紹介する。

最近の遺伝子研究によれば、新たなリスクに挑むのも安全を志向するのも脳細胞内の遺伝子と関係があるようである。たとえば、ドーパミンの第四レセプター内の遺伝子情報が長い場合、新規探索傾向が高いことが確かめられている。

逆に、第17番染色体の遺伝子によってセルトニン・トランスポーターが少なくなった場合、将来に不安を感じる傾向が高いということである。この不安を感じる遺伝子をもつ人の割合は、アメリカで68%であるのに対して、日本では97%と圧倒的に高いという報告がある。

(4) 自己責任についての常識

日本人は農耕民族であり集団を好むが、アメリカ人は狩猟民族で自己責任を重んじるという議論がある。銃社会であることもそれと関連するといわれる。自然との関係でも日本人が「共存」を志向するのに対して、アメリカ人は「対立」といわれる。

ケーブ・コッド国立海洋公園 (Cape Cod National Seashore) を訪れたとき、浜辺に「監視員なし (No Lifeguard on duty)」の表示があった。差し替え式で、監視員のいる時は「監視員あり」の表示になると思われる。国立公園内なのでシャワー設備もあり、更衣室も利用でき、浜辺は多くの観光客でにぎわっていた。日本なら国の施設に監視員もおかずに観光客を入れることに議論がおこりそうである。

グランド・キャニオン国立公園 (Grand Canyon National Park) の谷へ下る道には「谷間の底は高熱になるので、自分のリスクと責任で降りるように」という表示があった。ザイオン国立公園 (Zion National Park) では、昼でも暗い峡谷の間に行くことができるが「増水時の危険は覚悟するように」というサインがあった。

エバーグレイズ国立公園 (Everglades National Park) では駐車場ワニと出会った。イエローストーン国立公園 (Yellowstone National Park) とヨセミテ国立公園 (Yosemite National Park) では熊に出会ったが、パークレンジャーがじょうずに杖で音をたてて追い払った。アメリカの国立公園ではワニや熊に限らず猛獣と遭遇することを承知で公園内に入る必要がある。そうした動物との接し方は国立公園の案内書にあるが、リスクは観光客の自己責任にあると考えられている。

よく言われることだが、欧米の電車・地下鉄では「白線の後ろに下がってお待ちください」のようなアナウンスはないし、エスカレーターで「お

子様の手をつないでください」というようなアナウンスは聞いたことがない。欧米では、鉄道やエスカレータの乗降に関するマナーは「自己責任の常識」である。

4. 宗教と伝統の国

アメリカの起業家精神を論じる場合、「建国」と「ピューリタニズム」を避けて通れない。「建国」自体が創造的であり、ピューリタニズムが独立精神の基盤になっている。アメリカは宗教と伝統を重んじる国である。

日本でアメリカは歴史の浅い国という誤った認識が残っているのは、明治以降、西洋史研究がドイツ語の文献を通して始まったことと無縁ではないといわれる⁷⁾。たとえば、アメリカ革命 (American Revolution) を「アメリカ独立戦争」と解釈する傾向が残っているが、Revolutionary War とよばれる「アメリカ革命」は「フランス革命」に影響を与えた市民革命である。アメリカはイギリス人によって作られた「新たなイギリス (New England)」であり、少なくとも民主主義とキリスト教の伝統を論じる場合、アメリカの歴史はイギリスというフィルターを通じてギリシャ・ローマに溯ることを日本人は軽視しがちである。

(1) 祝祭日にみる宗教と伝統

アメリカの祝祭日は常に宗教と伝統とともにある。もちろん、祝祭日は、季節に区切りをつける日になっていたり、商業的なイベントの日にもなっているが、それぞれの意味は、宗教や建国の伝統と深いつながりがある。また、州単位で祝祭日が異なるため地域に根ざした日もある。

アメリカの祝祭日は、国で決められた「国民の祝祭日」と州政府が決める「州独自の祝祭日」に分けられる。全米的な国民の祝祭日は、New Year's Day (1月1日)、Martin Luther King Jr. Day (1月第3月曜日)、Independence Day (7月4日)、Labor Day (9月第1月曜日)、Veterans Day (10月第4月曜日または11月11日)、Thanksgiving Day (11月第4木曜日)、Christmas Day (12月25日) の6日である。

州独自の祝祭日は、最も少ない Maine や Ohio では3日、最も多い Louisiana で10日と、州

によって異なるが、多くの州で President Day (2月) や Memorial Day (5月) や Columbus Day (10月) が祝祭日になっている。また、南部の州では Robert E. Lee's Birthday (1月) を祝日とする州が多い。

休日になっていなくとも生活の中に定着した日として、宗教的な日や伝統と深く関連する日がある。生活実感を通じて得た歳時記は以下の通りである。

Epiphany (1月6日): カトリックでは三人の博士がキリストのもとへ訪問した「三王の祝日」といわれ、ギリシャ正教ではキリストの洗礼を祝う「あかりの祝日」とよばれる。クリスマスから数えて12日なので Twelfth Day ともいわれ、Little Christmas ともいう。

St. Valentine's Day (2月14日): 日本のように女性がチョコレートを贈る日ではなく、男女、夫婦、先生と生徒などさまざまな間で花などが贈られる。

Ash Wednesday: イースターから日曜日を除いて40日前にさかのぼった Lent (四旬節) の第一日目。カトリックでは懺悔を行なうため懺悔のシンボルである灰が使われる。

St. Patrick's Day: アイルランドの守護聖人パトリックを祝う日で、緑の服装をしてビールを飲む人が多い。アイリッシュやカトリックの多い地方で盛んと聞いている。

Easter: 復活祭はユダヤ教の春分祭の風習が残っており、Easter Egg Hunt というカラフルな卵探しの子供の行事として行われる。

Halloween: ケルト族の習慣やローマの Apple Queen 祭に起源があるが、ローマがケルト族を征服した後、カトリック教会が11月1日を、全ての聖者や魂が集う万聖節 (All Hallows' Day and All Souls' Day) と定め万聖節の前日 (All Hallows Eve) としたことに由来する。子供たちが Trick or Treat と言いながら家々を回る。

また、アメリカの休日は、建国と伝統に深いつながりがある。Independence Day (独立記念日) はいうまでもなく、アメリカ建国を祝う日で、small town でもメインストリートでパレードがある。東部では、4月に革命戦争 (独立戦争) が始まった日を記念するイベントがある。

全国的な休日になっていないが、多くの州で祝日とされる日も建国や歴史とつながりがある。President Day は、州によって Washington's Birthday や Lincoln's Birthday と呼ばれ、2月に誕生日のある Washington や Lincoln を記念した日である。Memorial Day は、南北戦争後、兵士の墓に花を飾る習慣に基づきローガン将軍が始めた5月最終月曜の戦没者祈念日である。Columbus Day は、コロンブスがアメリカ大陸を発見したことを祝う日である。

日本の祝祭日が「海の日」のように歴史や宗教と無縁の日が多いのに対して、アメリカのカレンダーには歴史や宗教が刷り込まれている。Indian Summer の頃からハロウィーンのオレンジと黒のカラーが街を包み、クリスマスの赤と緑の世界に変わっていくのを生活の中で実感した。

(2) Thanksgiving に見る建国精神

これらの祝日のうち、宗教と建国が結びついたゴールデン・ウィークとして Thanksgiving Day をあげることができる。Thanksgiving は11月第4木曜日で翌日も含め休日とする企業が多いので4連休になる。こうした長い連休ということもあって Thanksgiving は「家族の日」で、多くの人が故郷へ帰る。ゆっくり伝統料理を食べて、食後は家族そろって散歩を楽しむが、正月料理を食べた後に初詣にでかける日本の様子にも似ている。

Thanksgiving 前夜も日本の大晦日を思い出させる。交通機関や高速道路は帰省客で混雑し、人々は特別料理の食材を買いにスーパーに急ぐ。翌日から数日間は店が閉まるので筆者も買い出しにでたが、買い物客は小走りで慌ただしく、ちょうどクリスマスの準備を始める季節なので、店頭にツリーやリースが並んでいて、その光景が門松や松飾りの特設売り場のように見えた。逆に、Thanksgiving の当日は、日本の元旦のように街は静まりかえり、市中の道路は閑散としている。

周知のように、アメリカの起源の一つは Mayflower 号でやってきた Pilgrims Fathers (巡礼始祖) に求められる。彼らは、1620年に Plymouth 開拓地を建設するが、入植当初、職人や商人が多かったこともあり、狩猟や耕作の仕方

を知らず、大自然の中で冬を越す間に半数の者が寒さと飢えで102名のうち半分が死んでいった。

そんな時、酋長マサソイトと Native American たちが現れて、狩りの仕方、食べられる木の実の見分け方からトウモロコシの栽培方法にいたるまで、大自然のなかで生き抜く智恵をさずけられる。

その年を無事に乗り切った Pilgrims Fathers たちが、最初の収穫を感謝したのが、Thanksgiving (感謝祭) で、三日間続いた祭典には、Native American たちも招かれている。マサソイト酋長は5頭の鹿を土産にもってきて、90人の部下と一緒にこの祭典に参加し、実りの秋をともに祝ったという。

Thanksgiving に纏わる話は多く、マサソイト酋長の弟、クアデキンタが鹿の皮いばいに「はじけるトウモロコシ」を持って来たという記録もある。アメリカ人が大好きなポップコーンも、この「最初の感謝祭」に添えられたのである。

今でもアメリカの家庭では、この時期に、インディアン・コーンを飾り、アメリカ土着の鳥である七面鳥を焼いて、クランベリーやサツマイモを使った料理をする。クランベリーは Native American の食べ物だったし、ふだんはポテトを食べるアメリカ人がサツマイモを食べるといっても植民地時代の食生活と関係がある。

したがって、Thanksgiving は、建国の苦労と歴史を思い出す日といえる。Native American が最初の Thanksgiving に招かれた話や、Washington が特別な日として制定し、Lincoln が11月第4週の木曜日を国民の祝日に決めたことなど、たいいていアメリカ人が知っている。

(3) 歴史を大切にす国柄

Pilgrims Fathers が最初に開拓地を建設した Plymouth には Plymouth Rock と呼ばれる石がある。Pilgrims Fathers が Mayflower 号から最初に下船した時に踏んだという石で、Pilgrims Fathers が到着した1620年の数字が刻まれている。

しかし、この石はどう見ても後の人々が作り上げた記念碑である。第一級の歴史的資料、William Bradford の「プリムス植民地について」では、Mayflower 号は Cape Cod に漂着した後にハドソ

ン川周辺を探索しようとした。しかし、嵐にあって Cape Cod まで戻っている。良港を求めて周辺を探索して回ったわけで、下船にあたっても厳冬の中で彼らには余裕がなかった。当然、どの石がアメリカ到着第一歩を示すかなどということは特定できない。

ところが、アメリカでは、Plymouth Rock を知らない人はいない。全米自動車協会（AAA）の公式ガイドブックにも小学生向けの歴史書にも「Plymouth Rock に第一歩が印された」と明記されている。Plymouth Rock は砂浜の端にあるが、バルテノン神殿を思わせるような花崗岩の屋根つき前廊（portico）に覆われて、風雨から保護されている。

Kentucky のリンカーン生誕の地（Lincoln Birthplace）を訪れた時にも同様の違和感を感じた。Lincoln は、丸太小屋から大統領になったことで有名だが、彼の生まれた丸太小屋も再建されて、風雨を避けるために立派な神殿風の建物の中に保存されていた。

後からレプリカを作って、本物でないものを大袈裟な白亜の殿堂にしまい込むというのは筆者には違和感があったが、それは Lincoln の重みを知らない日本人の感覚なのかも知れない。

Colorado の Mesa Verde National Park を訪問した際には、Native American の住居跡を作っている光景を見た。考古学的な検証に基づいているのであろうが、遺跡を後から堂々と作っていることに驚いた。

しかし、エスノメソドロジー的に見るならば、レプリカであろうと、市井の人々に訴える見本例が歴史観を形成するわけで、アメリカは建国からの歴史が浅いために一層歴史を大切にす国柄であることは間違いない。筆者が Plymouth で泊まったホテルには Plymouth Rock を模倣した石が温泉プールの中央に置かれ子供たちが遊んでいた。そのような「歴史体験」が日常知を形成するといえる。

(3) アメリカの歴史教育

小学校から「ナイロン製のバックパック、ビニール靴、プラスチックの筆箱や弁当箱、昼食用の缶ジュースなどを持たせないで登校させてほし

い」という通知があった。年に数回、一部屋学校（one-room school）とよばれる丸太小屋で学習する寺子屋体験学習があった。その丸太小屋は郡（county）が共有する古い小学校で、郡の公立小学校が順番に出張教育を受ける。先生は「大草原の小さな家」に出てくるような服装で、子供たちも木綿の服や靴で参加する。羽ペンとインクを使い、コピーした教材は出さずに、一つしか窓のない教室で「昔の授業」を再現する。伝統を身体で体験する場を郡の教育委員会が設けているのである。

すでに祝祭日を通じて、歴史や宗教が人々の生活に定着していることにふれたが、こうした祝祭日や季節ごとに繰り返されるイベントが歴史教育の機会になっている。

アメリカの国立公園は、重要な自然教育と歴史教育のシステムになっている。ビジター・センターは国立公園の自然と歴史について分かりやすい展示をしており、統一された地図と歴史紹介の公式パンフレットがある。専門教育を受けたパーク・レンジャーが、丁寧に歴史を教える。

東部や中西部には開拓村（pioneer village）とよばれる昔の small village が数多く残されている。そこでは、水車でトウモロコシを引いたり、鍛冶屋（Black Smith）が実際に馬具などを作って見せている。冷蔵庫のない時代に食料を保存した貯蔵庫に実際に食糧がおかれていてバターや蠟燭の作り方を教えてくれる。加えて、どの small town にもビジターセンターや資料館があり、町の歴史が紹介されている。

Boston の州議事堂ホールに独立戦争当時から国旗が飾られ、中央の Star Spangled Banner Flag の前には「脱帽、禁煙」の注意書きがあった。髪を染めピアスをした若者まで含めて陽気なアメリカ人が国旗の前では無口でまじめな顔つきになる。アメリカでは1943年の West Virginia 州教育委員会の決定を機に、一般人に対して国旗への忠誠を求めることは憲法違反とされているが、生活習慣としては、国旗への忠誠は高い。

周知のことではあるが、官公庁はもちろんのこと、祝祭日でなくとも国旗を掲げる民家が多い。スポーツの前に国旗掲揚と国歌斉唱は常識で、スタンドやスタジアムの観客は全員起立し脱帽し国

歌を斉唱する。イベント等で国歌を歌うことは名誉とされ、有名人歌手がこぞってこれを歌う。政府要人や軍人が死亡した場合は、棺は星条旗に包まれ、民間の家でも半旗を掲げる。

生活実感として「旗の多い国」という印象が残っている。国旗は歴史を象徴しているが、アメリカの歴史教育の特徴は具体的・体験的であるということである。それは、次に述べる英雄伝説による見本例ともつながっている。

(4) 英雄伝説による歴史形成

アメリカ人ならよく知っている独立戦争の英雄に Paul Revere がある。彼はフランスからの移民であった父の後を継いで銀細工職人をしていたが、ボストン職人仲間を通じて独立運動に参加、ボストン茶事件でも Native American に扮装して加わっている。

独立戦争直前の1775年4月18日、Paul Revere は、イギリス軍の動向を調べるために Charlestown のウィリアム・プレスコットと示し合わせて、イギリス軍が陸路で攻めてくる場合は一つのランタンを North Church の塔の上に掲げ、水路で攻めてくる場合は二つのランタンを掲げることを決めた。

そして、Boston Common 近くに集まったイギリス軍のボートを見て、水路から攻撃があると判断し、ランタンを二つ寺男に命じて教会の塔に掲げさせた。さらに、Paul Revere はイギリス船の停泊するチャールズ川をボートで渡り、馬を走らせ、Lexington にいた Samuel Adams や John Hancock などアメリカ側のリーダーにイギリス軍の攻撃を知らせた。

当時、アメリカ側の弾薬は Concord に結集されており、それを察知したイギリス軍が奇襲を計画していた。ところが、Paul Revere の機転と行動力によってイギリス軍奇襲をアメリカ側が事前に知るところとなり、Boston と Concord の中間地 Lexington で独立戦争の火ぶたが切って落とされたことになる。

このエピソードは、国民的な詩人 Henry W. Longfellow の“Paul Revere's Ride (ポール・リビアの早馬)”という詩になり、アメリカでは小学生でも知っている。“Listen, my children, and

you shall hear. Of the midnight ride of Paul Revere. (子供たちよ、聞きなさい。ポール・リビアの真夜中の疾走を)”で始まる詩は、リズムがよく、独立戦争前夜の緊張感を今に伝えている。

すでに筆者は、パラダイム論において、見本例としての武勇伝の重要性を指摘してきた⁸⁾。アサヒビールの組織パラダイム変革の事例において、樋口語録やスーパードライ発売時のエピソードが武勇伝化して、変革の見本例を作ってきた。本論は、組織変革論ではないが、アメリカにおいても、英雄伝説が独立革命という創造的活動の見本例になっていることに注目したい。

歴史を調べれば、Paul Revere の行動だけがイギリス軍急襲を阻止したわけではない。急襲を計画したのはイギリス軍の Thomas Gage 将軍だが、その命を受けた Francis Smith 大尉が進軍に手間取り、彼らが Lexington に到着したのは夕刻であった。イギリス側の不手際もあったのである。また、Paul Revere がチャールズ川の北側のルートをとったのと同時に、William Dawes が南側から Lexington に伝令に走っている。

しかし、Longfellow の詩によって武勇伝化した Paul Revere の伝説が、エスノメソドロジー的にいえばアメリカ人の日常的な歴史観を形成したといえる。それは、Boston の Freedom Trail を歩けばすぐに分かる。Old North Church はランタンを掲げた教会として有名になり、その前の広場は、Paul Revere Mall と名づけられ、馬にまたがった Paul Revere の像がある。また、Paul Revere の家が近くに保存されており、彼の墓も Park Street Church 裏にある愛国者の墓地として有名な Granary Burying Ground にあって、多くの観光客が訪れる場所になっている。

こうした英雄伝説は各地の small town にもみられる。たとえば、Indiana 州西部の Vincennes には George Rogers Clark の立派な記念堂があって National Historic Park にも指定されている。厳冬の中、オハイオ川の支流である Wabash River を渡ってイギリス軍の砦を背後から急襲し、独立戦争を援護した武勇伝をもつ人物で、こちらはアメリカ人の常識になるほど有名ではないが、Vincennes では英雄とされている。

(5) 自己信頼の思想

全米にチェーン店を展開している書店 Barnes & Noble の店頭で平積みされているエマソン (Emerson, Ralph W.) のエッセー集『自己信頼 (Self-Reliance)』を見た。Barnes & Noble 社が最近 (1995年に) 発行したものである。

1837年、ファイ・ベータ・カップ (φβκ) Harvard 大学支部で講演したエマソンの「アメリカの学者 (The American Scholar)」は、「アメリカの知的独立宣言」として知られている⁴⁾が、「学者は考える人であれ」「本の虫になるな」という言葉には「自己信頼 (Self-Reliance)」の思想が込められている。学者は、本に頼るのではなく、自分を信頼し、自分自身の心に聞いてみるというわけである。

注目すべき点は、エマソンの難しい本が、今日でも Barnes & Noble 社のような大型書店で繰り返し再発行され平積みされているということである。また、数多くあるエマソンのエッセーを集めながらタイトルを『自己信頼 (Self-Reliance)』としている点である。

その本の背表紙には “What I must do is all that concerns me, not what the people think. (他人がどう思うかではなく、自分の思うことをなせ)” というエマソンの言葉があり、最初のページには “To believe your own thought, to believe that what is true for you in your private heart is true for all men, that is genius. (自分の考えを信じ、自分にとって正しいことは人類の真実と信じるのが、賢明だ)” という一文があった。

エマソンの活躍した Concord を訪れたとき、驚いたのは、ソロー (Henry David Thoreau) が『森の生活』を書いたウォルデン池 (Walden Pond) がアメリカ人観光客で満員だったのに対して、『若草物語 (Little Women)』を書いたオルコット (Alcott, Louisa May) の家は、日本人観光客で満員だったということである。周知のように『赤毛のアン』の舞台、Prince Edward Island も日本人の人気観光スポットである。

エマソンの哲学書が売れ、文学者オルcottの家よりも思想家ソローの住んだ池にアメリカ人が引きつけられるというのは、どうしてだろうか。そこにはアメリカ人の共鳴する「自己信頼の思想」が共通項として息づいているように思える。

日本人は「組織に帰属したい」「誰かとながってほしい」と考えがちだが、アメリカ人は「自分以外のものに帰属したくない」と考える傾向がある。自己信頼の思想である。ウォルデン池はごく普通の池である。しかし、そこでソローは社会から隔離された「自分の世界」を生きることができた。そこを訪れてソローのように池を眺めて自分を見つめ直したい。そう考えるアメリカ人が多いように思えた。

5. Puritanism と起業家精神

アメリカの民主主義と資本主義を語る場合に避けて通れないのが Puritanism の伝統である。Puritanism は、多様な移民の文化と融合しながらアメリカ文化の核心的体質となり、アメリカ人の国民意識の底に定着している。

ここでいう Puritanism とは宗教的信条のことではない。本論のそれは生活のあらゆる側面に影響をあたえている文化的要素であり、カトリック教徒であってもユダヤ教徒であっても、アメリカ人である以上、何らかの影響を受けている国民的体験そのものである。エスノメソドロジー的に表現すれば、「日常知 (commonsense knowledge) としての Puritanism」といえよう。

(1) 孤立主義のルーツ

アメリカは不思議な国である。モンロー主義の国でありながら、帝国主義と批判される国である。自国の利害と結びつかない紛争にはいっさい手を出さない一方で、世界の警察を自認して世界中に出兵する。この、アメリカ人の孤立主義と拡張主義のルーツは、すでに Puritanism にみられる。それは、ピューリタンが二つの勢力の合体だったからである。

第一の勢力は、分離派の人々である。彼らはス

⁴⁾ ホームズ (Holmes, Oliver W.) が『エマソン』の第四章で、この講演を「アメリカの知的独立宣言」と評したことは有名である。

チュアート王朝の新教徒弾圧から逃れてオランダに移り住んだが、この地からも逃れてメイ・フラワー号に乗って1620年にアメリカに渡り、Massachusetts と Plymouth の植民地を建設した。住む場を追われて巡礼してきた人々という意味でピルグリム・ファーザーズ（巡礼始祖）とよばれている。

彼らは、もともとイギリス中北部にあった人口わずか200ほどのスクルービ村に住んでいた人々で、Plymouth 植民地建設の中心的指導者 William Bradford もスクルービ村のウィリアム・ブルースターの館で行われていた宗教的な集いに参加していた少年である⁹⁾。

分離派の人々は自分たちの小さな宗教的世界を守ることを大事にしており、政治的野心はほとんどもっていなかった。したがって、彼らのアメリカ移住は、新しい国家の建設のためではなく、自分たちの宗教的信条を守るための既存社会からの積極的な隔離、すなわち孤立主義に起因していたのである。

分離派の人々の孤立主義を物語る典型は、オランダ脱出の動機にみられる。彼らは当時「自由の国」とよばれていたオランダでの新しい生活に満足しなかった。それは子供たちがオランダの影響を受けて同化することを危惧したからである。

分離派の歴史を語る代表的な資料に Bradford の『プリマス植民地について』があるが、彼は「あらゆる悲しみの中でも堪えがたいほど苛酷なものは、子供たちの多くが、…この国の若者のあいだのひじょうな放縦やその土地の幾多の誘惑によって、悪い手本にならって、節度を失い、危険な道に引きずりこまれ、たががゆるんで両親から離れてゆくことであった」と書き残している¹⁰⁾。彼らは自分たちの世界を守るためにアメリカに移住を決心したのである。

(2) 拡張主義のルーツ

ピューリタンを構成する第二の勢力は、イギリス国教会に反対する反体制派の牧師など教職者たちに率いられた会衆派の人々である。分離派の人々は農民や職人であったが、会衆派の指導者は、学識も高く野心も強く世俗権力と結びついて

いた。

もともと、ピューリタンとは英国国教会の改革を不十分としてこれを清浄化しようとした人々の総称である。 cromwell の清教徒革命を想起すれば、当時のイギリスにおいて宗教と政治がいかに密接であるか理解できる。彼らはカトリックであったメアリー女王の新教徒弾圧から逃れて一度ジュネーブなどに逃れたが、エリザベス女王即位とともに一部が帰国した。

彼らのうち長老派は、ジュネーブでは政治改革も行い、スコットランドでも政治権力と結びついていた。宗教改革は政治改革と同時に行なわなければならないと信じる人々で、エリザベス女王の後、ジェームズ一世の弾圧強化で反体制の運動をイギリス国内で展開していた。

たとえば、1630年に Salem に移住し、ボストン植民地を建設した初代 Massachusetts 総督ジョン・ウィンスロップは、治安判事職にあるジェントリーであった。彼らは、比較的高い社会的地位にあり、世俗権力から孤立することはできなかった。新教徒弾圧の結果、アメリカに渡ったが、その目的は亡命ではなく、新たな国家建設によってイギリスに対抗することであった。ここにアメリカ独立の革命思想のルーツがあり、Puritanism の拡張主義が見え隠れする。

こうした孤立主義と拡張主義は、矛盾することなく今日のアメリカでも生き続けている。それは、次にみるアメリカン・デモクラシーの比較において、より図式的にみてとれる。

6. アメリカン・デモクラシーと起業家精神

アメリカン・デモクラシーだけでも論文ができるテーマだが、ここでは、ジェファーソン民主主義とジャクソン民主主義を比較することで、アメリカン・デモクラシーにある孤立主義と拡張主義をみてみたい。また、両者の比較だけではアメリカン・デモクラシーがとらえられないことを平民主義という側面で切り取ってみたい。

(1) ジャクソン民主主義とは

山本(1971)は、ジャクソン民主主義の成果として、①党人任用制と官職交代制、②各州の一般

投票による大統領選挙人の選出、③コーカサスに代わるナショナル・コンベンションによる大統領の指名、④男子普通選挙制の拡大、などをあげているが、いずれも政党政治の制度的改革にとどまり、ジャクソン民主主義の内容は貧弱だったと批判している¹¹⁾。たしかに、男子普通選挙制の拡大でも、選挙権の採択は各州にまかされていたので、ジャクソンの大統領時代に男子普通選挙制になった州は一つもない。

むしろ、ジャクソン民主主義の成果は、ジャクソンの政治改革よりは彼の時代そのものをイメージしており、彼自身の経歴にみられるように、平民 (common people) の間に政治意識を高め、政治を大衆にとって身近にしたことであろう。

Andrew Jackson は貧しい丸太小屋で生まれたが、独学で法律を学び、テネシーの法務官になり、1812年戦争で連邦軍少将としてニューオーリンズの戦いでイギリス軍を破って一躍有名になった。ジャクソンは「平民 (common people) 出身の大統領」として民主主義のシンボルとなり、彼の時代に民主主義が人々の間に広まった。大衆新聞の発行、奴隷反対運動の激化、婦人参政権運動の開始、大衆文学の興隆、公立学校の普及など文化・教育面での民主主義的進展がみられた¹²⁾。

しかし、そのジャクソンが、1830年にインディアン強制移住法を成立させ、緑豊かな東南部に住んでいた Native American を西部に追いやったのである。白人との共存を望んで独自の文字をもち新聞まで発行していた Cherokee を厳冬の季節に移住させた「涙の道 (Trail of Tears)」が有名だが、そのようなジャクソンの政治姿勢と民主主義をどのように結びつければよいのであろうか。

(2) ジェファーソン民主主義とジャクソン民主主義

ここでいう「ジェファーソン民主主義」とは「建国当時の民主主義」の総称である。彼の時代は英国から独立する時代であり、農業の時代であった。したがって、彼の民主主義は、白人（厳

密に言えばイギリス人）の民主主義であり、農業に立脚した独立自営農 (self-reliant yeoman) の民主主義であった。ジェファーソンは、独立宣言を起草する前にヴァージニアで50エーカーの土地を均等に配分するヴァージニア邦憲法草案を書いているが、ここに小農民を基盤にする農業共和国の構想が読み取れる。

また、独立思想そのものにピューリタンの伝統が影響を与えていたことから、道徳的で理念的な民主主義といえる。ジェファーソンと農本主義を物語るの『ヴァージニア覚え書き』の一節「もし神が選民というものをもち給うとすれば、この大地を耕すものこそ、神の選民である。この人たちの胸にこそ、神は特別のみはからいによって、真に価値のある純正な美德を託し給うたのである」¹³⁾が、ここに、彼の思想の保守性と孤立主義がみとれる。

さらに、ジェファーソン自身が奴隷を使う大プランターであったこと、William and Mary 大学で学んだ弁護士であることなどから、彼の民主主義は（平民出身のジャクソン民主主義に比べて）貴族的あるいはエリートののである¹⁴⁾。彼の市民という概念は王権に対するものであり、ジャクソンの時代の移民や平民のことを直接イメージしていない。

これに対して、ジャクソン民主主義の時代は、工業化の時代であり、移民流入の時代である。したがって、彼の民主主義は多民族を対象とした大衆的な民主主義であり、産業主義的な拡張主義をもっている。また、ジェファーソン民主主義が信仰と結びつき内面的・静的であるのに対して、ジャクソン民主主義は自由な社会階層間の移動を促したという意味で外部志向的で動的である。

ターナーはジャクソン民主主義を「フロンティア民主主義」ととらえようとし、シュレジンガーはそれを東部勤労大衆の動向を基盤に解釈し、ホーフスタッターはそのなかに新興資本家階級の投射をみた¹⁴⁾が、フロンティア拡大にしても、大衆運動にしても、新興資本家の台頭にしても、そ

¹¹⁾ 筆者は、アメリカの大学が Colonial college にルーツがあり、William and Mary 大学をはじめとする東部の Colonial college がエリート主義的教育を行っていたことを拙稿「アメリカの州立大学」（長野大学紀要第21巻第2号）で述べている。

れは、「拡張主義の民主主義」と結びつく。

やがて、彼自身がそうであったように、貧しい移民が成功するアメリカン・ドリームの時代、あるいは Mark Twain の作品に由来する「金びか時代」が到来する。産業革命が進展すると機会平等の原理が競争の市場原理と結びついて拡大していく。資本の論理と社会的進化論が民主主義の理念と結びつく。実際に、産業革命後に統一した「一つの市場」を得たアメリカは鉄道の時代を迎え、「明白な運命 (Manifest Destiny)」という名目で西部へ拡張していくのである。

ジャクソンが民主主義のシンボルであると同時に、インディアン強制移住法によって Native American を西部に追いやった張本人であるという矛盾は、実は、その時代の民主主義がもつ拡張主義と深く結びついているのである。

Boston 近郊の small towns である Lexington と Lincoln と Concord を結ぶ一帯に Minute Man National Historic Park があるが、この国立歴史公園が1959年に創設された時の宣言文に “in a memorial to the first effective stand against Colonial rule, a revolution still going on in other parts of the world (世界で初めて実質的に植民地支配に対して立ち向かったことと、その革命が今も世界各地で進行していることを記念して)” という一文がある¹⁹。1950年代は、世界各地で植民地の独立が続いていたことを考えると、こうした文章が加えられたことは理解できるが、ここにアメリカ民主主義の拡張主義がみてとれる。

民主主義は良いことだから世界各地に広めていかなければならないという考え方である。自分たちの正しいと信じたことは、他の人々にも伝えていきたいというのは宗教的な拡張主義にも通じ、Puritanism の拡張主義的側面にも繋がる。また、アメリカが「明白な運命」と豪語して西部へ進出したのも、遅れた Native American に自分たちの政治・経済・社会制度を伝えることが使命であるという考えに基づいている。

ちなみに、「帝国主義」という言葉は、レーニンが階級闘争の言葉として使う以前にアメリカで使われていた。それは、資本主義の世界制覇を意味するのではなく、一つの集合体が他の集合体に影響を拡大することであり、エジプトやローマで拡

大した支配領域を「帝国」と呼んだことに由来する¹⁹。

(3) Lowell にみる産業革命と民主主義

農本主義的ジェファーソン民主主義と産業主義的ジャクソン民主主義の比較を Boston 郊外の small town である Lowell の事例でみてみたい。Lowell は Merrimack River の水力を利用して発展した綿工業の町である。町の名、Lowell とは、イギリスから綿織機を導入した技術者の名前である。

この町では、19世紀の初頭、多くの農家の娘が Cotton Girls の名のもとに工場で働いていた。当時の農業は小規模で近代化が遅れていた。特に、東部の small town の農家は貧しかった。したがって、彼女たちにとって、農業に従事するよりも工場で働いた方が経済的に有利だったのである。

しかし、Lowell のような綿工業の町が各地にできるようになると、激しい価格競争がおこって、彼女たちの賃金は抑えられ長時間労働を強いられるようになった。すると、彼女たちは工場で働かなくなり、一部ではストライキも行った。しかたなく経営者は競争力維持のために安価な移民を雇うようになったということである¹⁷。

そして、彼女たちに代わって Lowell に流入してきた移民こそ、アメリカに新たなパワーを与えた人々である。この small town では、最初に Canada 系のフランス人がやってきて、アイルランド人、ドイツ人が続いた。

この町に黒人奴隷はやってこなかったが、この町の競争相手は南部の綿工業都市だった。その後、この small town は南部や海外の安い綿製品との競争に敗れ衰退する。コスト競争の担い手は Cotton Girls から移民に移ったが、やがてその移民も町を離れていったのである。

ここにジェファーソン民主主義とジャクソン民主主義の違いを読み取ることができる。産業革命の初期に活躍した白人女性たちは、ジェファーソン民主主義の影響を受けており、市民の権利意識が発達していた。アメリカ独立そのものが市民革命だったからである。彼女たちの生活は決して楽ではなかったが深い宗教心とともに自分たちの生

活を守る self-made の思想があった。

市民意識をもった人間は権利を侵害されると行動と結びつく。アメリカ革命が、アメリカ植民地の得ていた既得権がフレンチ・アンド・インディアン戦争後の英国支配によって侵害されたために生じた¹⁴ように、彼女たちの市民意識が低賃金長時間労働を嫌う行動に結びついたのである。

ジェファーソン民主主義は自己の内面的な価値観に根ざしているので社会運動とはあまり結びつかない。彼女たちがこの小さな町 Lowell でストライキを強行したのは婦人参政権やスト権が確立されるずっと前のことである。1840年の世界奴隷制反対会議に女性の参加が認められなかったことでもわかるように、女性の権利が認められるのは奴隷解放の後である。アメリカ史を年表的にみれば、婦人参政権や労働者のスト権確立が産業革命の後になってしまうが、small town の生活に目をむけると順序が逆だということに気がつく。

その後に入流してきた移民は、アメリカンドリームという経済的な成功を夢見てきた人々である。それを保証したのがジャクソン民主主義である。資本の論理と民主主義と結びついて移民が Cotton Girls を追いやる。そこには機会均等と自由競争が結びついている。

やがて、産業革命が深く進行していくと市場競争力のある者が勝ち残るという自然淘汰の原則（ソーシャル・ダーウィニズム）が台頭していく。ここにアメリカ拡張主義のもう一つのルーツがある。

(4) ジャクソン民主主義と平民主義

本論ではジェファーソン民主主義を自給自足的農業に立脚した「孤立主義」と結びつけ、ジャクソン民主主義を産業革命期の「拡張主義」と結びつけて論じてきた。しかし、19世紀半ばのジャクソン民主主義は、建国の市民革命思想を平民主義として平民に知らしめたという別の意義をもつ。

1848年にラナルド・マクドナルドが捕鯨船で日

本に近づき、遭難をよそおって日本に上陸した。母親が Native American だったので日本に親しみを感じていたのである。しかし、彼は長崎に護送され座敷牢に閉じ込められた。

その後、アメリカの軍艦が長崎に入港して艦長が会見を奉行に申し込んできた。奉行は、当の艦長が本国でどれほど重要な人物であるかを判断するために、マクドナルドに「艦長はアメリカでは上から数えて何番目の人物か」と尋ねた。その時のマクドナルドの答えは「まず第一が、人民（people）…」だったという¹⁵。

まずコモン・ピープルがあって国家が成り立つという「建国＝民主主義」というアメリカン・デモクラシーを「建国＝天皇制」という歴史観を引きずる幕末の日本人は理解しがたかったようである。

今でも日常知的にいえば、アメリカは「誰がつくったか」という質問にワシントンやビルグリス・ファーゼースをあげてしまいがちだし、アメリカでは「誰が一番偉いか」という質問に「大統領」と答えてしまいがちである。だが、答えは、少なくともジャクソン民主主義にしたがえば、いずれも「コモン・ピープル」である。平民出身のジャクソンは、みずからが大統領になることで、平民がアメリカで一番上にあるということを平民に示したのである。

7. Small Government の思想

アメリカの民主主義が自治にあることは広く知られている。州政府が主権国家のように強大な権限をもち、州ごとに教育や生活関連の法律が異なる。しかし、その州の独立は、small town の独立と密接につながっている。

(1) コモンとタウン・ミーティング

東部の街を行くと、街の中央にコモン（common）とよばれる空き地が必ずある。公園になっている所もあれば、街のシンボルを中央におく広

¹⁴ 英国の他の植民地が英国人と現地人という上下関係をもっていたのに対して、アメリカ植民地は英国人と英国人の関係だった。当初、アメリカの植民地には自由な土地の所有など特許権（charter）が与えられていた。それが、アメリカにおける英仏戦争であるフレンチ・アンド・インディアン戦争の結果、仏領植民地が併合されたことで、英国のアメリカ植民地支配が強化された。それが、独立戦争の契機となっている。

場である場合もある。筆者は1974年に Boston Common とよばれるボストン中心部の公園をしばしば訪れて、人々が自由に思い思いの時間を楽しんでいるのに感心した。楽器を弾く者、絵を描く者、手作りの作品を売る者、日本なら騒音や商売の規制がありそうな公共の場で、人々がそれぞれの主張をしていたのが新鮮だった。

そして、その common の意味(後述)を何度かの訪米と滞在の末に再確認した。この Boston Common は1634年に市民が共有する公有地となり、それ以来、さまざまな歴史を刻んできた。1638年には Quaker 教徒や海賊、犯罪者を罰する処刑台が置かれている。

独立戦争前夜には、既述のように、イギリス軍が船で Charles River を上ろうとして Boston Common で野営し、Paul Revere がそれを見て伝令に走った。

1851年には、Anita Bloomer が男性ズボンに似た服装で女性の権利を訴え、それがブルマーのルーツになったといわれるが、彼女がその独特の服装で演説をしたのも、この Boston Common である。

今日でも、common 広場には一人で演説をする者もいる。この夏、訪れたときには、カントリー・ミュージック風の音楽祭が行われ、その横では、チョークで大きな敷石に落書きをするコンテストが開かれていた。人々は本を読んだり、スワンボートに乗ったり、思い思いに憩いの時間を楽しんでいた。

このコモン空間が、アメリカの政治意識の源泉であり、small town と small government と small business を結ぶ手がかりである。

(2) town meeting の伝統

筆者が研修留学中に統一地方選挙があった。大統領選挙、中間選挙も含めて、アメリカの選挙は秋にある。選挙という民主主義のイベントが定まった年中カレンダーとなって生活の中に組み込まれている。

選挙前の様子も違う。ところどころに候補者の名前を書いた小さな立て札が立てられるが、日本のようにポスターがいたるところに貼られるようなことはない。選挙宣伝カーによる連呼もない。

地方選挙は大統領選挙と違ってテレビによる選挙運動もない。街は静かに投票日を迎えた。ところが、当日、数箇所の投票所に行ってみると、住民が次々とやってきていた。

投票は、投票マシーンによって行われていたが、街の議員や保安官から市長、州知事、上院議員まで非常に多くの人を選ぶのに住民は迷うことがなく、投票にあまり時間をかけていなかった。驚いたことに、州憲法の修正に対する投票も同時に行なわれていた。法律の条文がかかれていて、それを選ぶのである。彼ら彼女らは、どのようにして投票の判断を用意するのであろうか。

ポスターや宣伝カーやテレビは、大衆政治で見られる マス・マーケティング の手法であるが、アメリカの少なくとも small town には、そのような選挙戦術はみられない。代わりにあるのが、小規模な集会である。人々は立候補者の演説を聞いて、対話をする。政策の中身を確かめて誰を選ぶか、あるいは州憲法の条文を判断する。

いうまでもなく、ここに「自分たちの町ことは自分たちが決める」という town meeting の伝統がある。政治の基本単位を small town に置いた town meeting は、アメリカ民主主義の原点でもある。

もちろん、町の住民全員が town meeting に参加するわけではない。全立候補者の話を聞くことは時間的に大変である。そのことを友人 H 氏に尋ねたら、弁護士などが、そうした town meeting の情報を伝えてくれるので、候補者の考え方は自然と住民に伝わると教えてくれた。宣伝カーもポスターもない静かな選挙運動に「自分の目」で選ぶという自己信頼の思想があるように思えた。

その分、選挙結果はシビアな住民のチェックをうける。アメリカには連邦警察→州警察→カウンティ・ポリス(シティ・ポリス)という警察機構があるが、一方で自治的な警察機能として住民の投票によって選ばれるシェリフ(sheriff)という保安官がいる。筆者の留学中にシェリフが牢獄運営の資金を私的に流用するという事件があったが、これが地元新聞に告発され住民の厳しい批判を浴びていた。

また地方自治と国政がネットワークで結ばれている。選ばれた市長は、知事や上院議員を支持す

る。アメリカの大統領選挙がコーカサスやコンベンションを通じて地域の代議員から選出されるのも small town の意志を国政に反映する仕組みである。

逆に、上院議員や知事も small town を大切にす。筆者の研修留学中にクリントン大統領の弾劾裁判があったが、その時は、上院議員が自分の意志を説明するために Bloomington まで回ってきた。

アメリカ民主主義の底力は地方にある。「人民の人民による」自治があって「人民のための」政治が成り立つことを small town は実践している。そこにある「根っこの確かな (ingrained) 民主主義」こそがアメリカの強さである。

8. 自己実現と起業家精神

本稿では、起業家精神を自己実現と結びつけて論じてきた。それは small town のライフスタイルと結びついている。コモン・ピープルが自分の手の届く範囲で、あるいは実感できる範囲で仕事をしたいという欲求と結びついている。

(1) 三つの small と common の感覚

日本人に比べて、アメリカ人は「小さいこと」への憧れが大きいように思える。その代表例が、small town と small government であり、small business である。国家レベルや経済レベルでは拡張主義的が目立つが、個人レベルでは政府を小さくとどめ、小さな町で手の届く範囲で手応えのあるビジネスをしたいという願望がある。

アメリカの政治の中心は small town にある。ニューヨーク州の州都は New York ではなく Albany であり、カリフォルニア州の州都は Los Angeles ではなく Sacramento であるが、さらに小さな単位で政治が生きている。

既述のとおり、アメリカでは small town が健在であり、town meeting を基盤とする small government が機能している。そこには、建国以来のジェファソン民主主義が息づいており、強い独立精神と自己信頼あるいは自己責任の意識がある。

この small town と small government は、コモン (common) という共通項をもっている。コモ

ンという共有地は、町の人々が自由にくつろぐことのできる憩いの場であり、民主政治の場でもあった。

開拓者たちは state (州) を作るまえにコモンウェルス (commonwealth) という自治国を作ったが、それはコモン・ピープル (common people) による手の届く範囲の国づくりであった。Massachusetts 植民地がみずからを Colony ではなく Commonwealth と称したのは、王政に対する common people の国づくりを表明していたのである。

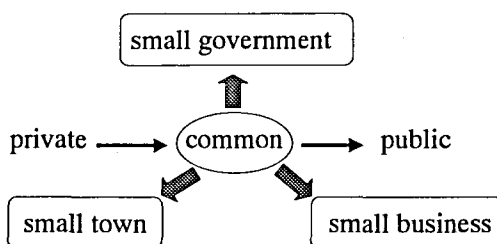
アメリカの法律がコモン・ロー (common law) とよばれる慣習法であるのも、あるいは市民参加の陪審員制度を維持しているのも common people (市井の人々) の common sense (常識) が政治・司法の理念的基礎となっているからである。

Thomas Paine の『コモン・センス (Common Sense)』は、初めに「政府はたとえ最上の状態においてもやむをえない悪にすぎない¹⁹⁾」と「小さな政府」の理想を述べ、聖書の言葉から分かりやすく世襲制 (王政や貴族政治) を批判し、コモン・ピープルによる共和制の必要を説いている。

この小冊子がアメリカ革命の引き金になったことは有名だが、表現が論文調ではなく平易な日常語で語られていること、最初は匿名で出されたこと、リプリントにリプリントを重ねて人々の間に広まったことなどを含め、アメリカ人の心をつかんだことは確かである。ここに「平凡な人の日常の中に自己実現があり、それが理想の国づくりにつながる」という「コモン・センス (常識)」が潜んでいる。

コモン (common) とは、私的世界 (private) と

図表 アメリカにおける small 志向とコモンの考え方



公的世界 (public) の中間にある世界である。それは、small town の自治的コミュニティのみが共有する世界であり、手作りの感覚が残る公私共有の場である。こうした場でこそ、自己が実現できるとアメリカ人は考えているように思える。

(2) 起業家精神における拡張主義と孤立主義

起業家精神をギャンブル精神と同一次元でみると誤りに陥りやすい。日本人は、アメリカ人がリスクを好むギャンブル好きの国民と考えがちだが、起業家精神は山師的な野心だけでは育たない。

もちろん、世俗的な成功は美德とされ社会進化論の影響も残っているアメリカ社会では起業家精神は拡張主義的な側面ももつが、他方で、起業家精神は自己実現と深い繋がりがあがる。事業を起こすことが、セルフメイドの自分の世界を創ること、あるいは他人と違う自分を実現することに通じる。

アメリカでは成功したベンチャーが比較的早い段階で身売りをするケースが多い。あるいは、株式公開した段階で、専門経営者に経営を任せて、早々と余生を過ごす起業家がいる。それでも隠居生活をするのではなくガレージで機械いじりをしたり、コンピュータの前でソフト作りをする。ハンドメイドのビジネスを続けるのである。

世俗的な成功や野心は拡張主義を刺激するが、ある段階で孤立主義的な自己の世界を守ろうとする。すでに Puritanism にもアメリカ民主主義にも孤立主義と拡張主義が内在していることを示した。起業家精神にも、拡張主義と孤立主義が微妙に絡み合ったところがある。

(3) 自己信頼と少子化

あるアメリカ人に「沢山のネズミを狭い箱に入れると子供を産まなくなるというが、日本は大都市への一極集中によって少子化を招いたのではないか」と尋ねられた。Bloomington に8年住んでいる日本人の夫人は「この環境だと子供がたくさん欲しくなる」と語った。たしかに、アメリカの small town の強さは出生率が低下していないということと関係がある。

その夫人によれば、small town の居心地のよさ

は、教育と経済にある。子供の教育に神経を配る必要がないし、生活費が相対的に安いので、安心して子供が産めるといふ。

庭先に野生のウサギやリスが現れ木登りできる木が豊富にあるような環境では、子供はコンピュータ・ゲームに夢中にならないようである。学校教育が画一的でないので、受験勉強の負担も少ない。小学校から高校まで、個人プロジェクトとよばれる自主的学習が中心である。

逆にこうした small town では「しつけ」が家庭でも学校でも厳しく、自己責任の思想が徹底している。また、地域のイベントがキリスト教的カレンダーにしたがって子供を育てているためピューリタンの自己信頼の思想も生まれる。夏休みが長いので多くの子供がサマーキャンプに参加するが、そのキャンプは自己責任の観念を植え付けている。日本の子供たちの自己中心的な行動や自律の遅れは、自己責任の考え方が身につけていないことと無縁でないように思える。結果的にそれが親にとって余計に子育ての負担になっている。

アメリカの small town では自給自足的なライフスタイルが継続しているので、贅沢さえしなければ、生活費は極めて少なくすむ。自由競争の結果として貧富の差が広がっているという報道は都市部のスラム化した町を取材したマスメディアの作ったアメリカであり、small town では、失業者や老人は安定した生活をしている。それは、低コスト社会だからである。ベンチャービジネスに失敗しても安い農産物を買って贅沢しなければ small town では暮らしていける。

高コスト社会は、落ちこぼれに厳しい社会である。日本で失業が不安なのは高コスト社会だからである。土地や物価が高いため一度失職するとホームレスになってしまう恐怖がある。学校でも落ちこぼれないようにと考えるのは、落ちこぼれが個性ではなく弱者に直結するからである。

Midwest は「古き良きアメリカ」を代表しているといわれるが、その理由の一つは、出生率が低下せず、勤勉、清潔、正直が美德とされ、土地に定着しながら“live good lives in a good world”という健全な常識をもつ若者が多いからかもしれない。少なくとも私の留学した環境ではブランド物のバッグを欲しがり流行をむやみに追い求める

若者とは出会わなかった。

(4) Big Ship から small town へ

1866年、横井左平太と横井太平が、長崎の宣教師フルベッキ (Verbeck) の紹介で留学したが、その際、留学理由を尋ねられて「Big Ship と Big Gun について学びたい」と述べたという³⁰⁾。

最初のアメリカ留学生ジョン万次郎は、5か月間の無人島生活の後、ジョン・ホートランド号という捕鯨船に救助され、ボストン近郊の small town、フェアヘブンに着いた。筆者は万次郎が住んだホイットフィールド船長の家を訪ね、万次郎が学んだストーン・スクールという私塾も見学したが、筆者を迎えてくれた Deborah Morris というホイットフィールド船長の子孫から、万次郎が羅針盤の読み方など航海術を学んだことを聞いた。当然、万次郎の知識は、勝海舟らを通じて日本の知識人に伝えられたはずである。

明治時代のアメリカは造船先進国であり、ペリー艦隊に驚いた当時の日本人がまずは、航海術を学ぼうと考えたのは当然である。それが、第二次世界大戦の巨艦主義にまで通じるが、戦後もアメリカから経営術を学ぼうとした点において、Big Ship の伝統は今日まで継続しているといえる。

筆者自身も、1982年から1984年までビジネススクールで、ファイナンスという経営術を学んだが、その際、アメリカ人の起業家精神のルーツについては考えが及ばなかった。アメリカではハーヴァード・ビジネススクールを卒業した学生の大半がベンチャー・ビジネスに関与している。ベンチャーといえば聞こえがいいが、small business (零細企業) であり「小さな組織」である。

日本では東京大学を卒業した若者の大半が官庁や大企業など「大きな組織」を志向する。本論の「大学院を出て新聞配達をする青年」で述べたが、日本で大学院を卒業した学生が好んで新聞配達を始めるだろうか。

その違いが、自己責任を好みセルフ・メイドのビジネスを志向するアメリカ人のライフスタイルに関係があるとしたら、航海術や経営術のような表面的な技術をいくら学んでもベンチャービジネスの核心は学べない。筆者は、今回の再留学を通

じて、small town のライフスタイルから起業家精神のルーツを学んだように思える。

まとめにかえて

日本とアメリカは違うという議論がある。国民性や国土の広さや遺伝子を理由にアメリカの起業家精神はアメリカの特殊事情のもとで生まれたという議論である。本論でも紹介したように、それらは根拠のないことではない。

しかし、こうした議論は、日本でベンチャーは育たないという結論を導き出す。国民性、国土、遺伝子などで、違う土壌に種をまいても無駄だという議論である。そうなれば、種をまくこと自体がナンセンスである。国家によるベンチャー支援は国民の血税を無駄使いしていることになる。

近代社会が人間疎外を生んだことは多くの社会学者が指摘するとおりである。特に、海外から工業化と民主主義を導入したわが国では、国家や首都に対する地方 (small town) の依存を生み出しており、組織に忠誠を誓う分だけ都市部での人間疎外も深刻であるように思える。

第二次産業中心の工業社会において集団主義的な経営はうまく機能した。組織で働く人々もコミュニティにかかわって組織に帰属することで疎外感をまぬがれてきたからである。しかし、第三次産業が拡大し、情報化が進展する中で、組織からも放り出された人々の人間疎外は深刻である。

こうした情報化の進展と人間疎外の観点にたてば、自己を身近なセルフメイドの世界で実現する起業家精神は、「アメリカの特異性」として単純な異文化論の中で切り捨てることができない。ベンチャーを利用して経済を再生しようというような単なる経済活性化の政策論でもすまされない。

日本人は明治以来、Big Ship の秘密をアメリカに学び、造船技術から経営技術まで表面的な成果を学んできたが、本論では、起業家精神をアメリカの small town のライフスタイルと結びつけて論じてきた。起業家精神は経営技術論では理解できないものを含んでおり、Puritanism やアメリカ民主主義の伝統と切り離すことができない。

アメリカにおけるPuritanismは宗教的ピューリタン社会が終焉した後も、断絶することなく社会・文化の中に体質として継承された。宗派や人種

に関係なく、特に、その道徳性は、本来の教義や信仰が衰退した後も市民意識としてアメリカ社会に浸透した²¹⁾。

同様に、アメリカン・デモクラシーは、農本主義的ジェファソン民主主義と産業主義的ジャクソン民主主義をへて、アメリカ人のライフスタイルに深く浸透している。企業を起こす行為は、起業家にとって「建国」のイメージと直結しているのである。

アメリカは広大で多様な国であるので、筆者の経験だけで結論を導き出すことはできない。そのことを十分承知した上であえて言うならば、マスコミ報道や短期間の調査旅行でみえないものがある。世俗的な成功を追い求める「拡張主義的な起業家精神」の存在は自明すぎるので、本論ではあえて切り離してきた。むしろ、自己信頼に基づく「孤立主義的な起業家精神」の存在に気づくべきである。起業ということ自体が、少なくともMidwestのライフスタイルでは、自分を確認し、生きることの証であり、神が味方し、誰からも共感を得る道につながっているように思える。

(1999. 10. 7 受理)

注

- 1) 唐澤和義「コミュニティの崩壊と再生」国際基督教大学社会科学研究所, p. 3.
- 2) 駒沢敏器「Small Town Talk」NHK英会話テキスト
- 3) 駒沢敏器「Small Town Talk」NHK英会話テキスト, p. 83.
- 4) Richard Parchemin, *The Life and History of North America's Indian Reservations from the 19th Century to the Present Day*, JG Press, 1998, p. 130.
- 5) 拙稿「心のステンシル “エクスキューズ・ミー”」Develop誌1993年10月号, 産能大学
- 6) 拙稿「パラダイム変革とエスノメソドロジー」長野大学紀要第21巻第2号, 1999年, p. 162.
- 7) 中屋健一『新アメリカ史』三省堂, 1985年, pp. 1-9.
- 8) 拙稿「パラダイム変革と新製品開発」長野大学紀要第18巻第4号, 1997年, p. 24.
- 9) 大下尚一訳『ピューリタニズム』研究社, 1976

年, p. 14.

- 10) 大下前掲書, p. 38.
- 11) 山本幹雄「政治—19世紀における政治権力の軌跡」『岩波講座・世界史20』岩波書店, pp. 398-399.
- 12) 中屋前掲書, pp. 65-66.
- 13) 富田虎男「ジェファソンと農本主義」『機会と成功の夢』南雲堂, 1969年, p. 169.
- 14) 山本前掲書, 1971年, p. 402.
- 15) *Concord Journal*, January 22, 1959.
- 16) 中屋前掲書, p. 7.
- 17) Lowell National Historic Park の PR film
- 18) 村井実『もうひとつの教育』小学館, 1984年, p. 266.
- 19) トーマス・ペイン／小松春雄訳『コモン・センス』岩波文庫, 1976年, p. 17.
- 20) 村井前掲書, p. 214.
- 21) 大下前掲書, p. 9.

参考文献

- Concord Journal*, January 22, 1959.
- 井原久光「アメリカの州立大学」長野大学紀要第21巻第2号, 1999年
- 井原久光「パラダイム変革とエスノメソドロジー」長野大学紀要第21巻第2号, 1999年
- 井原久光「パラダイム変革と新製品開発」長野大学紀要第18巻第4号, 1997年
- 井原久光「心のステンシル “エクスキューズ・ミー”」Develop 誌1993年10月号
- 唐澤和義『産業社会とコミュニティ』勁草書房, 1985年
- 唐澤和義「コミュニティの崩壊と再生」国際基督教大学社会科学研究所
- 駒沢敏器「Small Town Talk」NHK英会話テキストマッキーヴァー『コミュニティ』ミネルヴァ書房, 1975年
- 村井実『もうひとつの教育』小学館, 1984年
- 中屋健一『新アメリカ史』三省堂, 1985年
- 大下尚一訳『ピューリタニズム』研究社, 1976年
- Richard Parchemin, *The Life and History of North America's Indian Reservations from the 19th Century to the Present Day*, JG Press, 1998.
- トーマス・ペイン／小松春雄訳『コモン・センス』岩波文庫, 1976年
- 富田虎男「ジェファソンと農本主義」『機会と成功の夢』南雲堂, 1969年
- 山本幹雄「政治—19世紀における政治権力の軌跡」『岩波講座・世界史20』岩波書店